

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00547

研究課題名（和文）一人称寄り視点が無い琉球語で生じる現象の究明と消滅の危機にある南琉球語の保存

研究課題名（英文）Investigating the Phenomenon of the Absence of First-Person Perspective in Ryukyuan Languages and the Preservation of Endangered Southern Ryukyuan Languages

研究代表者

荻野 千砂子 (OGINO, Chisako)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40331897

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：南琉球語には、補語を高めるだけでなく主語も軽度にも高める機能を持つ謙譲語が、八重山宮良方言だけでなく、竹富町黒島や、北琉球語の喜界島方言にも見られることを明らかにした。謙譲語による自敬の現象も見られた。授受動詞体系は、喜界島方言を中心に「上位者から下位者」への授与を表す「くれる」の存在や、補助動詞での「～てとらす」の機能を明らかにした。また、共通語での授受動詞の発達を再検討するため、近世語の「～てもらう」の発達について新説を提示した。語彙の面では、黒島方言と宮良方言の兄弟名称の体系を明らかにした。さらに、消滅の危機に瀕する南琉球語の宮良方言の記述文法を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

琉球語の謙譲語を確実に証明することで、古代語の謙譲語を解明することにつながる。古代語の謙譲語は二方面敬語を許容したり、自敬を許容したりでき、現代共通語と異なる機能がある。琉球語の謙譲語は、同様のことを許容するため、古代語の謙譲語との比較研究が可能となる。また、古代語から近世語へ授受動詞体系は変化しており、琉球語の補助動詞「～てとらす」や「～てもらう」に、変化の過程が残存している可能性がある。その点で学術的意義が大きい。さらに、琉球語は消滅の危機に瀕する言語であり、録画や録音などデータを保存することは、社会的文化を守るために価値が高い。

研究成果の概要（英文）：It has been clarified that the "humble verb" in Southern Ryukyuan, which not only elevates the complement but also slightly elevates the subject, is found not only in the Yaeyama Miyara dialect but also in the Taketomi Town Kuroshima dialect and the Northern Ryukyuan Kikai Island dialect. Phenomena of self-respect using humble verb were also observed. Regarding the system of giving and receiving verbs, it was elucidated, with a focus on the Kikai Island dialect, that the verb "kureru" signifies giving from a superior to an inferior, and the auxiliary verb "te" functions as "～te torasu." Additionally, a new theory was presented on the development of "～te morau" in Early Modern Japanese to reassess the evolution of giving and receiving verbs in Standard Japanese. In terms of vocabulary, the systems of sibling terms in the Kuroshima and Miyara dialects were clarified. Furthermore, a descriptive grammar of the endangered Miyara dialect of Southern Ryukyuan was compiled.

研究分野：日本語学

キーワード：謙譲語 敬語 授受動詞の補助動詞 敬語の使役形 自敬 南琉球語 親族名称

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2016年～2019年度の研究では、南琉球語八重山宮良方言を中心に、敬語や授受動詞や指示詞の研究を行ったが、宮良方言以外の調査では、十分に解明できず、八重山方言としてどこまで一般化が可能が不透明な状況であった。また、南琉球語の体系をもとに、北琉球語の喜界島と与論島の方言との比較を試みようとしたが、南琉球語と北琉球語はかなり異なるため、基本的な形態素の勉強をしながら調査を試みた状況であった。具体的な研究テーマを以下にまとめる。

(1) 謙譲語 α と自敬の発見

南琉球語八重山の宮良方言での敬語には、共通語には見られない謙譲語があるため謙譲語 α と名付けた。謙譲語 α の機能は、主語と補語を同等に高めると定義した。具体的には、補語は主語と同等まで高められ、補語は主語よりも高く高めることができるというものである。よって、共通語の謙譲語と異なる特徴を持つ。例えば、知事が公民館長に花束を贈呈することを「知事が公民館長に花束をウヨーフン(さしあげる相当語)」と言える。これは、知事も公民館長も高めた言い方である。二方面敬語「ウヨーホールン(さしあげなさる相当語)」を使う方が、知事をより高めることができることも分かった。謙譲語 α は、条件によって自敬が許容することもできる。例えば、下位者の弘に対して、上位者の「私たち」への授与を依頼するとき、「私たちに花束をウヨーヒフヌ(差し上げてくれないか相当語)」と言える。これは、自敬に当たるのだが、弘に対する上位者として「私たち」が関係づけられるので、一人称に係る尊敬を無視し、上位者への尊敬が優先されるという「上位者優先のルール」があるために許容されるのだという仮説を立てた。以上の成果は宮良方言に見られた現象であり、新たな課題として「南琉球語の他の地域でも謙譲語 α があるのか、また北琉球語にもあるのか」という疑問が浮上した。

(2) 聞き手への敬意

喜界島方言では、聞き手が目上の場合に「動詞の語幹 + eer」の形式を用いる。一見すると、形態素 -eer が共通語の「です・ます」に相当する丁寧語の機能を持つように見えるが、従属節では主語尊敬を表す用法があることを確かめた。ここから、「動詞の語幹 + eer」は、聞き手への敬意を表すために、もともと主語尊敬機能を有していた -eer が、聞き手尊敬へと機能を拡張した可能性を考えた。このことを元にして、補助動詞の尊敬語(集落によって -iNsooiN、-iNsoojuN、-iNsoojuN、-iNpjojuN の形態がある)を調査したところ、主語尊敬機能の他に、主語ではなく聞き手への尊敬を表す機能があることが確認できた。具体的には、「私」を40歳と仮定して、「私」から入賞をした聞き手へ「授賞式では、あなたに花束をあげるね」と伝える場面を想定した。喜界島方言では、話し手より年下だと下位者、年上だと上位者になる。そこで、聞き手には、年下の高校生、45歳の鈴木さん、55歳の田中さん、85歳の佐藤さん、天皇陛下(ただし、天皇陛下には喜界島の特産品を献上するという場面に変更した)に対して、どのように言うかを調査した(表1)。

(表1) 一人称から「あげよう」と申し出をする場合

敬語形式は、聞き手のランクによって変化していき、まず、動詞が「クリイン(くれる相当語: 'は無気音を表す)」から「ウェーシン(さしあげる相当語)」に変化した。さらに、や では -eera(しましょう) が後接して聞き手への敬意を表した。ところが、や だと「～なさいましょう」に相当する -iNsoora が使用された。この形態素は、通常は、上位者への依頼表現で使用される主語尊敬語である。そのため、一人称主語で使用すると、自敬になる。だが、この場合は、主語を高めるのではなく、聞き手の佐藤さんや天皇陛下への尊敬を表す用法だとされた。口頭発表後、論文化をすることを目指した。

	聞き手	上嘉鉄 (かみかてつ)	坂嶺 (さかみね)	志戸桶 (しとおけ)
高校生		k'urira	k'urira	k'urira
45歳の鈴木さん		k'uri-eera	k'urira	k'uri-eera
55歳の田中さん		k'uri-eera weesi-eera	k'uri-eera agi-eera	k'uri-eera k'ur-iiNpjoora
85歳の佐藤さん		weesi-eera	agi-iNsoora k'ur-iiNsoora	k'uri-iNpjoora wEEs-eera
天皇陛下		wees-iNsoora	ag-iiNsoora wees-iNsoora	wEEs-iNpjoora

(3) 授受動詞体系の記述

北琉球語の喜界島方言では、本動詞の授与動詞は「くれる - くれる」で人称制約がないだけでなく、受納動詞「もらう」でも、同じく人称制約がないことを明らかにした。だが、南琉球語との相違として、一部の集落では「あげる」が用いられることも分かった。また、補助動詞用法を調査したところ、授与動詞で「～てくれる」と「～てとらす」と「～てやる」が混在して使用できることが分かった。本動詞では「とらす」も「やる」も授与動詞としては機能しないため、補助動詞用法でのみ使用することになる。これらの3つの機能について、どのような用法があるかは不明であり、今後の課題となった。

(4) 南琉球語八重山地方の指示詞体系

南琉球語宮良方言の指示代名詞には ku/u/ku 系の三体系があり、共通語の「これ/それ/あれ」に対応するよう見えるが、共通語のような距離を表すのではなく、相対的な距離が関係していることが分かってきた。しかし、黒島方言では、両手に持っているものを ku 系と ha 系の指示詞

を用い、全く距離が関係していないことも明らかになった。そのため、八重山全体では、指示詞体系の一般化が構築できていない状況であった。また、指示副詞は宮良方言で aNzi (アンジ) と kaNzi (カンジ) の二体系であり、指示代名詞と体系が異なる。宮良方言だけでなく、黒島でも ai と hai の二体系があるが、両者の意味的な区別が分からず、指示副詞の用法が解明できなかった。なぜ、指示副詞では二体系になって、体系が異なるのも不明であった。

(5) 消滅の危機にある琉球方言の簡易文法記述

南琉球語の宮良、黒島、船浮、川平で採取した自然談話を、話者に聞きながら書き起こしをする作業を断続的に進める必要があった。

2 . 研究の目的

本研究では、これまでの研究での不明点を明らかにすることと、さらに、調査の過程で生じるであろう、新たな課題を新設することを目的とした。

(1) 謙譲語 α の存在の確認

宮良方言にある「ウヨーフン (さしあげる相当語)」のみが特殊なのか、他の地域にもあるのかを検証する必要がある。他の地域にもあれば、琉球語の謙譲語は、共通語の謙譲語と異なり、謙譲語 α としての機能を持っている可能性が高くなる。謙譲語 α について、八重山地方や北琉球語で調査することを目的とした。

(2) 上位者優先の敬意の確認 (自敬の許容)

宮良方言で、自敬が許容されるのは、一人称複数主語で、聞き手が年上の人に対して話しかける場面と、下位者の主語から上位者の一人称補語、または一人称複数補語の場合であった。これは、上位者がいれば、一人称に係る敬意よりも、敬意の方向を優先せよという、「上位者優先のルール」があるためであると考えた。このルールも、宮良方言以外の複数の地域で許容されれば、琉球語として自敬が許容される可能性が高くなる。一人称単数では許容されにくい、一人称複数であれば許容があがるので、その点も考慮にいれて調査することにした。

(3) 授受動詞の補助動詞の記述

通常、授受動詞というと、「やる・くれる・もらう」とその敬語形の本動詞だけが注目される。しかし、授受動詞体系を考えると、補助動詞も授受動詞体系として重要ではないかと考える。そのため、補助動詞「～てやる・～てくれる」と「～てさしあげる」についても調査し、記述することを旨とする。

(4) 指示詞の体系

八重山前代の指示代名詞を一般化した理論で説明できないか考察することを目指す。

(5) 消滅の危機に瀕した南琉球語の保存

ユネスコは琉球語を消滅の危機に瀕する言語と認定している。特に南琉球語の八重山地方は 75 ~ 90 歳代の高齢者しか流暢に話せない状況になっており、消滅の危機度が高い。総合的な言語記述と言語保存に向けた取り組みを並行して行うことを目的とする。

3 . 研究の方法

(1) 謙譲語 α 、授受動詞体系に関する調査方法

話し手「私」を 40 歳とし、上位者と下位者の年齢を固定化し、モデル化した人物関係を設定する。宮良方言では、実際の間人関係よりも年齢のみで考えることを好んだためである。本研究では謙譲語の文法的機能を明らかにすることを目的とするため、モデル化した人物を想定することを目指す。しかし、具体的な人物関係の方が、わかりやすいという地域では、実際の人物を設定し、話し手「話者」を中心に、年上の人、年下の人を書いた表を作り、その表を見ながら、「さしあげる」や「やる・くれる」や「～てやる・～てくれる」が使用できるかを確認する。最初は、日本語共通語を翻訳してもらおう方法を探る。

(2) 上位者優先のルールの有無の確認方法 (自敬の確認)

主語での自敬の確認として、勧誘表現の例文を用いることとする。宮良方言では、上位者を誘うとき、例えば「今から、私と一緒に空港までいらっしやいましょう」と尊敬語を使う必要がある。これは、上位者の行動を優先して敬語を用い、一人称の「私」に係る敬意を無視するために生じる現象であろうと考えた。このように、上位者を含む「私たち」の文を複数作成して、テストを行う。また、宮良方言では、補語が「一人称単数」か、「一人称複数 (同位者同士)」か、「一人称複数 (上位者を含む)」かで、自敬の許容度が異なった。そのため、「一人称単数」が非文法的だとされても、「一人称複数」では許容される可能性を念頭において調査を行う。

(3) 指示詞の調査方法

共通語の指示詞とは異なる体系を持つことが明らかになり、相対的な距離が関係しているこ

とが明らかになったので、複数のものがある場面を設定して、調査を行うことにする。文脈指示や指示副詞に関しても、「複数の事柄」があるような場面を設定することとする。

(4) 自然談話の書き起こしの方法

自然談話を可能な限り採取する。また、その談話を書き起こして、文法情報を書くために、記述文法を充実させることとする。

4. 研究成果

(1) 南琉球語黒島方言と北琉球語喜界島方言での謙譲語αの確認

「さしあげる」相当語の調査を行った結果、南琉球語では、黒島方言に宮良方言と同じ機能があることを確認した。川平方言と船浮方言でも予備調査をしてほぼ同様の結果がでたが、話者が一人であるため、少し時間をおいて、再調査をする予定である。しかし、この予備調査により、南琉球語の八重山地方に謙譲語αが広く存在することが予測できた。

また、北琉球語の鹿児島県大島郡喜界島でも調査を行い、喜界島方言の「ウェーシン(さしあげる相当語)」にも、謙譲語αの機能があることが分かった。予備調査として、北琉球語与論島方言でも実施したが、その後、コロナの影響で中断をすることになった。

さらに、自敬の有無についても調査を行った。謙譲語αには、敬意の方向を優先する機能があるため、補語の一人称(あるいは一人称複数)が上位者であれば、「主語Xが{私/私たち}に花束をさしあげる」という自敬を許容する。しかし、いつでも自敬が許容されるわけではない。下位者主語から上位者補語の場合や、上位者を含む一人称複数の場面で許容されることが分かってきた。

また、「さしあげる」相当語だけでなく、「お連れする」や「申し上げる」相当語でも調査を行った。その結果、語彙によって、主語を高める機能の力が異なる可能性も見えてきた。南琉球語宮良方言の「シケーフン(お連れする相当語)」の調査を行ったところ、謙譲語αの機能はあるが、「ウヨーフン(さしあげる相当語)」と異なる点として、主語を補語と同等までは高めることはしないことが分かった。この理由については不明のままであり、今後、他の謙譲語αの語彙を調査し、比較しながら考察することとする。

(2) 尊敬語の使役形式

下位者が使役主体となる使役文が古代語に確認できる。『源氏物語』には、「おはします(いらっしゃる)の使役形「おはします(いらっしゃらせる)」があり、「従者の惟光が、主人の光源氏を*いらっしゃらせる」のように使用されている。現代語では、「太郎が先生を*いらっしゃせた」や「太郎が先生に*召し上がらせました」は非文法的とされるが、古代語では許容されたのである。そのような尊敬語の使役形が、南琉球語の黒島方言や宮良方言で使用できることが明らかとなった。

(表2) 尊敬語の使役形を使う人物関係

人物関係		文の種類 地域			話し手と 主語の 関係	共通語訳	依頼文	
		使役主体 X	動作主体 Y	目的地 P			黒島 A氏	B氏
田中	55	佐藤	85	藤本	85	いらっ しゃらせ る		
田中	55	太郎	35	花子	40		×	×
弘	25	太郎	35	佐藤	85			
弘	25	太郎	35	利香	20			
次郎	35	太郎	35	利香	20		×	×

このテーマは、当初の計画にはなかったが、調査の過程で新たに生じたテーマである。調査の結果、敬語の使役形を使用するとき、使役主体と動作主体の相対的な上下関係が重要視されることが明らかになった。例えば、「使役主体のXさんがYさんをPさんのところへ行かせる」とする。話し手の「私」を40歳と仮定し、「Xさん、YさんをPさんのところへ行かせてください」と依頼するとき、敬語を使うのは、表2のととの場合である。年齢が上の人が上位者であり、話し手の「私」(40歳)より、ととは、使役主体Xが田中さん55歳で上位者である。は敬語の使役形式を使うが、は使わない。重要なのは、「X<Y(XよりYが上位者である)」という関係で、それが当てはまるのがととである。つまり、話し手の「私」は、使役主体Xも動作主体Yも高めていない。人物関係の上下方向だけを重視している。これは、敬語の機能を考える上で重要である。琉球語の敬語は、単なる主語尊敬、補語尊敬だけでなく、関係性を重視する機能が存在するため、その点を調査する必要があることが明らかになった。また、使役形式の意味は「強制」だけでなく、下位者が上位者の行動を「補佐する/促す」という意味になることも発見した。

(3) 授受動詞の仕組み

授受動詞に関する研究成果を三点に分けて述べる。

一点目は、北琉球語の喜界島方言の「くれる」と「さしあげる」について記述した。共通語では一人称から二人称への遠心方向の授与では「私があなたにやる」となり、二人称から一人称への求心方向の授与では「あなたが私にくれる」となるが、喜界島方言では人称に関係なく「クリイン(くれる相当語: 'は無気音を表す)」を用いる。つまり、「やる・くれる」の対立がない。これは、日本語の方言でも多地域に見られる現象であるが、喜界島での「クリイン」は、上位

者主語から下位者補語への授与でも用いられることを明らかにした。例えば、話し手の「私」が40歳だとする。田中さん(55歳)が私の友人の香(40歳)に花束をあげたことを友達に伝えるとき、田中さんは先輩なので、共通語では「田中さんが香に花束をくださったよ」と、主語の田中さんに尊敬語「くださる」を用いる。しかし、喜界島方言では「クレル」が、上位者から下位者への授与を表すため、尊敬語でなくても、田中さんに対し失礼にならないのである。

逆に、敬語形式の「ウェーシイン(さしあげる相当語)」は、補語を高める機能があるが、むしろ、下位者主語から上位者補語へ方向を表すため、話し手の「私」(40歳)より補語が下位者でも、「弘(25歳)は太郎(35歳)に花束をさしあげたよ」のように使用できる。その意味で、「クリイン」と「ウェーシイン」は、逆方向の授与を表すことを明らかにした。

二点目は、北琉球語喜界島方言の授与動詞の補助動詞について考察した。本動詞では「クリイン」を用いるが、補助動詞では、「～ティトゥラスン(～てとらす相当語)」と「～ティクリイン(～てくれる相当語)」に分化する。一人称から二人称へ方向だと「私があるあなたの荷物を持つティトゥラサ(持ってあげよう相当語)」と「～てとらす」を用いることが多い。だが、本動詞の「とらす」は授与動詞ではなく、相手に物を「渡す」という意味を持つ移動動詞である。ただ、本動詞「とらす」が聞き手の望むものを渡すところから、補助動詞では意味が漂白して、「～してあげます」相当になり、使用しやすかったのではないかと考えた。だが、未解決の部分もある。補助動詞では、もう一つ「～ティヤース(～てやる相当語)」が、たまに使える。本動詞「ヤース(やる相当語)」は人が移動する移動動詞である。これも、補助動詞のみが授受動詞体系に組み込まれている。今後、補助動詞の用法を解明する必要がある。

三点目は、「～てもらう」について古代語での諸相を検討した。北琉球語も南琉球語も「～ていただく」形式がない。南琉球語には「～てもらう」相当形式がない。一方、北琉球語には「～てもらう」形式はある。これは、日本語での「～てもらう」の発達と関係があるのではないかと考えた。そこで古代語の「～てもらう」に関して、近世語(江戸時代語)を調査し、「～てもらう」の発達状況を考察した。その結果、近世語の「～てもらう」は、依頼の「～てくれ」よりも上位の敬意を表す表現として使用されていた可能性を指摘した。近世後期に「～てくれ」での依頼が多用されるようになると、より丁寧な表現として「～てもらう」が出現し、さらに、丁寧な依頼をするために、江戸後期に「～ていただく」が出現したのではないかという仮説を提示した。これは、敬意漸減の法則に当てはまる現象であると考えられる。今後、近世語の「～てもらう」と北琉球語の「～てもらう」との比較を行う必要がある。

上記の成果の他に、南琉球語の与那国方言の授受動詞や、北琉球語与論方言についても簡易的な調査を実施した。

(4) 兄弟を表す名称

親族名称の中で兄弟を表す名称の体系が、南琉球語八重山黒島方言と宮良方言で異なることを明らかにした。黒島方言では、一番上の兄と姉には、「大兄」「大姉」のように「大」の形態素をつける。二番目の兄と姉には「中」の形態素をつける。ところが、三番目以降も「中」である。そして、一番年下の人物のみ、「小」の形態素を付す。つまり、一番上は単数で、中は複数で、一番下が単数となる。ところが、宮良方言では、一番上が「大」、二番目が「中」、三番目が「小」の形態素をつけ、四番目以降は漢数字を用いる。これは、長幼の序を重視する呼び方になっていると言える。八重山の中心部は字石垣で、江戸時代を通して琉球王府に仕える士族が居住していた。『石垣方言辞典』を見ると、字石垣では一番上が「大」、二番目が「中」、三番目が「小」の形態素をつける呼び名であり、この影響を宮良方言は受けたのだと考えられる。逆に言うと、もともと八重山方言では黒島方言のような体系であったのが、士族的な考え方によって、変化したのではないかと考えた。

また、兄弟間でのこの呼称は、青年期以降に呼ぶ言い方であり、社会的な上下関係を明示する仕組みであることも明らかにした。さらに、この兄弟名称が呼称としても使用可能であることも明らかにした。共通語では「兄(あに)！」と呼びかけることはできないが、南琉球語黒島方言では、「ウブセー(大兄:おおあに)！」と呼びかけることが可能である。今後、古代語での呼称はどうだったのかを調査する必要がある。

(5) 指示副詞

共通語では「こう、そう、ああ」の三体系があるが、南琉球語宮良方言の指示副詞は、aNzi(アンジ)とkaNzi(カンジ)二体系である。実際に場面設定をして調査したところ、どの場面においても両方が使える。話者は「意味は一緒」と説明をする。よって、共通語のように、人称や距離が関係しているのではなく、一方がデフォルトで、一方が強調形式である可能性を指摘した。今後、論文化する予定である。

また、現場指示では、西表の船浮方言を調査することで、黒島方言の現場指示用法も分かってきた。今後、口頭発表と論文化をする予定である。

(6) 記述文法と方言の保存・その他

南琉球語宮良方言の記述文法を執筆した。また、各地点の談話資料を採取し、書き起こしをしている最中である。

その他、南琉球語のアクセントに関して、共同研究を始めることになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 荻野千砂子	4. 巻 99 (5)
2. 論文標題 下位者が使役主体となる使役文 - 南琉球語と古典語の比較 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國語と國文學	6. 最初と最後の頁 111-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荻野千砂子	4. 巻 64
2. 論文標題 方言を軸にした伝統文化教育 - 喜界町立早町小学校の取り組み -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学 国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 20-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荻野 千砂子	4. 巻 130/131
2. 論文標題 南琉球黒島方言と宮良方言の親族名称と呼称	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 483-470
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4783566	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荻野千砂子	4. 巻 3
2. 論文標題 八重山地方石垣島川平方言の名詞と形容詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	6. 最初と最後の頁 302-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荻野千砂子	4. 巻 0
2. 論文標題 沖縄県石垣市宮良	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の消滅危機言語・方言の文法記述	6. 最初と最後の頁 473-536
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荻野千砂子	4. 巻 2
2. 論文標題 八重山地方石垣島川平(かびら)方言の談話	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば 文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	6. 最初と最後の頁 213-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 八重山宮良方言と黒島方言の指示副詞
3. 学会等名 沖縄言語研究センター総会・研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 上代の指示詞用法の考察
3. 学会等名 2023年度東アジア日本語教育日本文化研究学会 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五十嵐陽介・荻野千砂子・セリック、ケナン
2. 発表標題 南琉球八重山語黒島方言の単純名詞のアクセント型の数は2か3か
3. 学会等名 科研費成果発表会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 西表船浮方言の指示詞の初期報告
3. 学会等名 第298回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 宮良方言の使役文 - 黒島方言との比較 -
3. 学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 喜界島方言と古典語に見られる授与動詞クレル・トラス・ヤル
3. 学会等名 2022年度第26回東アジア日本語教育・日本文化研究学会国際学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 喜界島方言のテトラスとテクレル
3. 学会等名 沖縄言語研究センター11月研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 本動詞トラスと補助動詞テトラス
3. 学会等名 第294回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 南琉球語黒島方言の使役文の主語と敬語の関係
3. 学会等名 2021年度前半期 沖縄言語研究センター定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 「～てもらう」の命令・依頼への用法拡大
3. 学会等名 第 382 回日本近代語研究会 2021 年度春季発表大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 *イラッサラセル相当語の使役の意味用法 - 中古語と琉球語の比較 -
3. 学会等名 第286回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 南琉球石垣宮良方言の謙讓語 の語彙に関して
3. 学会等名 2021年度後半期 沖縄言語研究センター定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 南琉球語のsi keehuNー古典語ツカウ・ツカワスとの関連をふまえて -
3. 学会等名 第289回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 南琉球竹富町黒島方言の「差し上げる」と補助動詞「～なさる」
3. 学会等名 第110回 日本方言研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 南琉球黒島方言の相対的上下関係による敬語 - 使役文の調査から -
3. 学会等名 第282回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荻野千砂子
2. 発表標題 黒島方言と宮良方言の親族語彙第
3. 学会等名 第283回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 青木博史、小柳智一、吉田永弘 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本語文法史研究6 / 荻野千砂子「宮良方言のsikeehuの意味と機能」	

1. 著者名 椎名美智、滝浦真人 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 327
3. 書名 「させていただく」大研究 / 荻野千砂子「テモラウの依頼用法 - テイタダク成立への契機 - 」	

1. 著者名 青木博史 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 513
3. 書名 筑紫語学論叢 / 荻野千砂子「北琉球語喜界島方言の授与動詞」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------